

上田万年の国語教育思想 -明治後期以降の国語統一への影響を中心に-

著者	宝力 朝魯
号	11
学位授与番号	56
URL	http://hdl.handle.net/10097/37086

BAO LI CHAO LU
宝 力 朝 魯

学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	教博 第 56 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程） 教育学専攻
学 位 論 文 題 目	上田万年の国語教育思想 —明治後期以降の国語統一への影響を中心に—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 加 藤 守 通 教 授 梶 山 雅 史 教 授 生 田 久 美 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近代日本の国語教育に多大な影響を与えた上田万年の国語教育思想を国語統一の問題に焦点を当てて包括的に論じたものである。筆者は、フンボルト等西洋の言語思想にルーツを持つ上田の標準語思想が我が国において実現されていった過程を、その思想的な背景に留意しつつ、上田をはじめとする当時の様々な言説の検討を通じて明らかにしている。その内容は、以下のとおりである。

第 1 章は「上田万年の国際観の成熟」では、まず第 1 節「上田に影響を与えた主要人物」にて、新井白石、ライプニッツ、フンボルト、チェンバレン等が上田の国語観に与えた影響が論じられる。筆者は、上田の国語観をこれらの人物の国語観とすりあわせることで、上田の国語観が占める歴史的な位置を、我が国のみならず西洋との関係の中で浮き彫りにするのに成功している。第 2 節「上田万年の国語概念」では、明治 20 年代のヨーロッパ留学を境として上田の国語観が変容する過程が描かれ、フンボルトの思想やドイツやイギリスの言語純化運動の影響が指摘されている。第 3 節「標準語の彫琢と上田万年」では、上田が目指した標準語の彫琢が教育、議員、法廷、演劇、文学といった様々な領域において展開されたことが示されている。本章は、西洋思想を含めた巨視的な視点から上田の国語観の特徴を位置付けており、これに続く章の基盤を提供してい

る。

第2章「日本の近代国語教育思想の形成と上田万年」では、言語と思想との緊密な関係を指摘する18世紀以降の西洋思想の影響を受けた上田が日本の近代国語教育思想の形成に寄与していく過程が、明治期における国語教育を巡る諸説との関わりに留意しつつ、三つの節を通じて明らかにされている。

第3章「上田万年の方言観」では、まず第1節「上田万年の国語観と国体主義の合体」にて、「民族の言語は民族の精神である」というフンボルトの主張から影響を受けた上田が、言語を国家の組織原理とみなし、方言を排除し国語を統一することで近代国家の統一を推進する方法に傾いていった過程が描かれている。その際、著者は、上田のヨーロッパからの帰国がちょうど明治期における国体論の高揚の時期と一致することを指摘し、西洋と日本のそれぞれの歴史的な激流の交叉の中に上田の国語観を位置付けている。著者は、上田がヨーロッパから帰国した後に、国体論への傾斜を強めていったことを指摘しているが、このことは、一見したところ日本固有現象にも見られる国体論をロマン主義的な言語・民族観と結び付ける視点を提供している。第2節「標準語と方言に関する上田万年の立場」では、標準語と方言を巡る上田の一見矛盾に満ちた諸言説を検討することを通じて、方言を容認すると見られる上田のいくつかの主張はあくまでも国語教育の過渡期における方便としての容認にすぎず、上田自身は中央集権論を支持し方言撲滅の方向に傾斜していったことが示されている。第3節「言語変化と言語改良に関する上田万年の見方」では、言語の改良の土台となっている上田の言語観自体が吟味され、それが、フンボルトの影響を受けて、言語の中に保守力と並んで改進黨を認めるものであることが示される。人類の発達と平行して言語が変化するという思想が、上田の標準語推進論の背景にあるのである。

第4章「明治後期以降の作文教育における上田万年の位置」では、標準語設定という国語政策上の功績と並んで上田に帰せられるもう一つの功績として、作文教育における上田の影響が論じられている。そこでは、先ず第1節にて、明治後期以降における作文教育の流れの概念が提示され、そのうえで第2、第3、そして第4節にて、作文教授法を巡る須永和三郎、樋口勘次郎、日比野朝子、芦田恵之助、鈴木三重吉の思想が上田の思想と比較され、共通点と相違点が洗い出されている。このことを通じて、上田の作文教育論が明治後期以降の他の論者の主張と多くの共通点を持ち、彼らに少なからぬ影響を与えたであろうということが明らかになる。同時に、筆者は、上田の作文教育が彼の標準語普及論と対になっていることに、その独自の特徴を見ている。

第5章「明治後期以降における国語教育への上田万年の影響」では、明治期後期以降の標準語教育と国語辞書編集における上田の影響が示されている。すなわち第1節「標準語教育・共通語教育と上田万年」では、明治35年から41年にかけて国語調査委員会の主事を務めていた上田が第1期国定教科書編纂に与えた影響が示され、さらに戦後の共通語教育への上田の影響にまで考

察が及んでいる。第2節「国語辞典と上田万年」では、上田自身による国語辞典編纂とその後の国語辞典への上田の影響が考察されている。

論文の末尾には、論文に関係する人物と出来事に関する32項にわたる詳細な年表が付加されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近代の国語教育の歴史において重要な役割を演じてきた上田万年の思想を国民国家の成立と統一言語の採用という世界史的な流れの中で捉えたうえで、上田をはじめとする近代日本における国語教育をめぐる様々な言説を入念に読み解くことによって、我が国の国語教育において上田が及ぼした多様な影響を明らかにしている。

近代国家における言語政策や上田の国語教育に関してはすでに多くの研究があるが、本論文の特徴は、上田のヨーロッパ訪問からの帰国と我が国における国体思想の高揚とを重ね合わせることで、ヨーロッパと日本の狭間の中で上田の言語思想を解説したことである。そこには、言語を民族の精神の反映とみなすフンボルトの言語思想の影響を重視し、上田の国語政策の背景にあるロマン主義的な民族・言語観を示すなど、興味深い示唆が含まれている。また、作文教育や標準語教育、さらには国語辞典編纂などにおいて上田が及ぼした影響も当時の史料をもとに詳細に論じられており、上田の活動の多面性を描き出すことに成功している。上田の思想と活動を西洋教育史と日本教育史の二つの流れから巨視的に捉えたこと、彼の思想と活動の背景にある西洋の言語哲学に関する研究を踏まえて上田の思想の背景を教育思想史的な流れの中で位置付けたこと、さらに上田の国語教育への貢献を多面的に論じたことは、評価に値する。

もっとも、このような包括的な視座から上田を論じることによって、議論が拡散し、個々の論述に若干の甘さが見られる、ということも認めざるを得ない。とくに、本論文の第2章では上田の国語教育思想に関するもっと踏み込んだ議論をして欲しかった。また、第4章のように、膨大な資料をじゅうぶんに整理しきれず、結果として荒削りな印象を与える箇所も存在する。このことは、そこで論じられているテーマ自体が興味深いものであるだけにいっそう惜しまれる。とはいえ、上田をたんに日本教育史の重要人物として見るのではなく、彼が有する世界史的な意義を明確にした本論文の論旨は、今後世界の様々な地域で展開されていくであろう言語教育を考える際にも参考になるものであり、教育史のみならず教育哲学の視点からもじゅうぶんに意義あるものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。